

びぶりおてか



同志社大学図書館報 No.10. 1971. 11. 1

新図書館の建設について

原 正
図書館長

I. 新図書館建設の経過

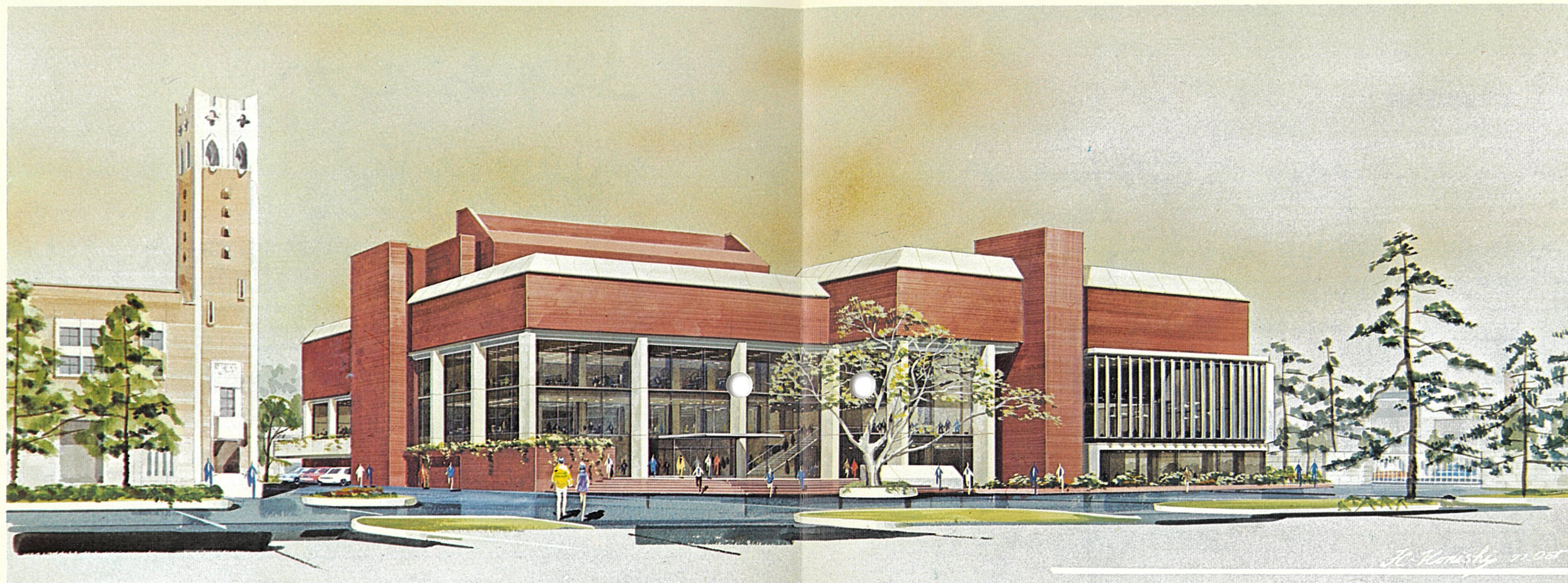
新しい図書館を建てる目的で烏丸今出川の角地が整地されて既に久しいが、まだその実現を見るに至っていない。心ある人なら「一体、図書館の建設はどうなっているのだろうか」と疑問をもたれるに相違ない。そこで、新図書館の建設問題につき、今までの経過を概括的に述べてみたい。それに先だち、図書館建設問題がどうしておこってきたかという背景を知る意味で、現図書館の実態を眺めてみよう。

現在の図書館本館は大正9年（1920年）に竣工し、当時としては外観内容ともに素晴らしく立派なもので、京都人の目を見はらせるに十分なものがあつた。しかし、それから早くも50年の歳月が流れ、現在ではあまりにも狭隘となつてしまつた。戦後における大学の急膨脹に対応して書庫の増築とか有隣館大閲覧室（格納庫の転用とさく）の開設など積極的な施策がとられてきたものの、今となつては施設の不備はおおうべくもない。

一方、図書館評価の一基準である閲覧席数について考えると、本館と有隣館で約450席、これに新町と会館の読書室などを含め約650席となる。私大連盟などで一般に云われている最低閲覧席数は在籍学生数の10%（国公立では20%）であるから、同志社の場合さしづめ2000席近くを用意しなければならないことになる。現状の施設の良否は別としても、この数字は現在の同志社大学図書館の貧弱さを如実に物語っている。

大学が学問研究の場であり、それに対するに自主的態度の強く要望されることは、まず異論のないところであろう。したがって、そのような活動に最良の条件が具備さるべきは当然のことであり、むしろ大学にとって最重要事に属するといえよう。ところが現実はどうであろう。読書中そばを人が通ると紙面がゆれたり、暖房用の石油ガスが鼻や咽喉を刺戟したり、換気や照明が不十分であつたり、それにもまして閲覧室の設計が落付かないものであつたり、およそ大学図書館というにはあまりにも歎かわしい次第である。

身近な京都の私学をみても、その規模にみあつた新図書館を完成しているものが多く、着々と教学施設を整備充実していることに驚かされる。しかも、この傾向は京都だけに限つたことではない。このような中であつて、ひとり同志社だけが現状のままで取り残されるようなことがあるとすれば、それは大学にとってゆゆしい問題である。



このような状況のもとで、新しい図書館を建てようという声は、かれこれ10年以上も前から、ささやかれていたように思う。しかし、これが正式に取り上げられるようになったのは昭和38年頃(上野学長・内田館長時代)であった。当初は現図書館を増築改装という考え方が支配的であったようだが、種々検討していく段階で独立の大図書館構想が生れた(星名学長・金山館長時代)。昭和42年秋(星名学長・小橋館長時代)には、部長会および大学評議会の議を経て理事会に新図書館の建設を要請し、それが認められて烏丸今出川角地の一部を整地するまでに至った。しかし止むをえざる諸般の事情により、その実現をみるに至らなかった。創立90周年事業の中にも図書館建設が挙げられながら、はかない青写真に終わってしまったことは、なんとしても口惜しいことであった。しかし、その後(齋藤代行・徳永館長時代)も、なんとかして障害をのりこえ新図書館を実現しようという努力がねばり強く続けられた。

同志社における大学紛争が熾烈化しようとしていた昭和44年4月、図書館内に新図書館建築実行委員会が発足し、図書館の近代化へ向けての改革、ならびに改革の一環としての新図書館像が精力的に追求され、約1年有半の歳月を費して設計条件が集約された。大学では、これを参考資料とし、学内の意見を徴して独自の原案を用意し、昭和45年11月、部長会、大学評議会で説明した後、各学部教授会にはかり本年3月基本的な賛同をえるに至った。また、同日の大学評議会で「着工時期は財政状態などを考慮して慎重にする必要があるが、一応前向きに進めてよい」との諒承をえた。

大学としては、早速理事会に対して設計者の決定を要請し、本年5月、その決定をみるに至った。設計者としては、図書館建築に深い理解と豊かな経験を持ち、創造力に富み、少なくとも機能的には時代の最先端を行くものをつくれるような新進気鋭の人を熱望していたところ、幸いその希望がかなえられ何よりも喜ばしく思っている。設計者の決定した段階で、大学では図書館建設委員会(学長の諮問機関で、設計者との連絡打合せに必ずやるのが任務)が発足することとなった。そして基本設計者には目下その設計を依頼中である。

ところで、大学改革が真剣に考えられている昨今、人によっては「大学図書館の未来像とそれに見合う建築」について疑問をもたれるかもしれない。しかし、この点については、内外の可能な限りの資料を集め、図書館改革の指向するものをふまえ、長年の調査研究によって設計条件を煮つめたわけで、前記疑問点については、まず問題はないものと考えている。

新しい大学図書館が指向しているものは、従来の整理中心主義から利用者中心主義への移行、ならびに情報センターの機能の充実にあることは明かである。大学図書館の役割は、端的にいえば奉仕の一語につきるが、その奉仕の形態は前述のように変わっていくことが必至と考えられる。したがって、新図書館は、そのような時代の要求に対応できるものでなければならぬ。

現在の図書館施設でさえ年間延36万人以上の方々にご利用いただいている。新図書館建設は、単に教学施設を整備するという形式的なことだけにとどまらず、そこで本を読み、考え、そして創造するに相応わしい快適な場所を提供する

という意味で緊急に着手さるべき重大事と考える。

以上、新図書館建設について現在までの経過のあらましを述べたが、大学改革という意味でも、また同志社大学が将来に向けて面目を一新するという意味でも、新図書館の実現に向けて全大学人の深い理解と支援とを切望するものである。

Ⅱ. 新図書館の概要 — 設計条件を中心として —

前述したように、新図書館の設計条件は、長期にわたる周到綿密な検討により集約された。ここでは設計条件のなかで骨格となる部分を簡潔に述べることにする。

〔1〕 新図書館の基本構想

今日の大学図書館に期待されている機能は大きく変貌しつつある。それは急速に発展する情報化時代に即応して学術情報を適確に把握すると共に、それを迅速に利用者に提供できる機能をもつことである。したがって、図書館資料の収集、整理、保管、利用のための施設、ならびに研究と学習を快適に行ないうる場所を提供すると共に本学の学術情報センターとしての機能を十分に果しうることが新図書館構想の基本条件であると考えられる。

〔2〕 概 観

新図書館の建設地は今出川校地内の烏丸今出川角地付近とする。図書館の敷地面積、総床面積および工費は未だ決定をみるに至っていないが、それらは設計条件にもられている諸件、たとえば閲覧席数、図書収容能力、図書館機能などを設計者が如何に調和総合していくかによってきまらるであろう。

内部構造は図書館として十分使い易く、機能的に考えるが、外観は大学の他の建物との調和を十分考慮する。建物の北側が大学のメインストリートとなるので、北側を建物の実質的な正面とする。新図書館には冷暖房施設を完備し、収容する図書は80万冊、また全閲覧座席数は1253席とする。ただし、建物は将来の変動に対処できる可能性をもつものとする。

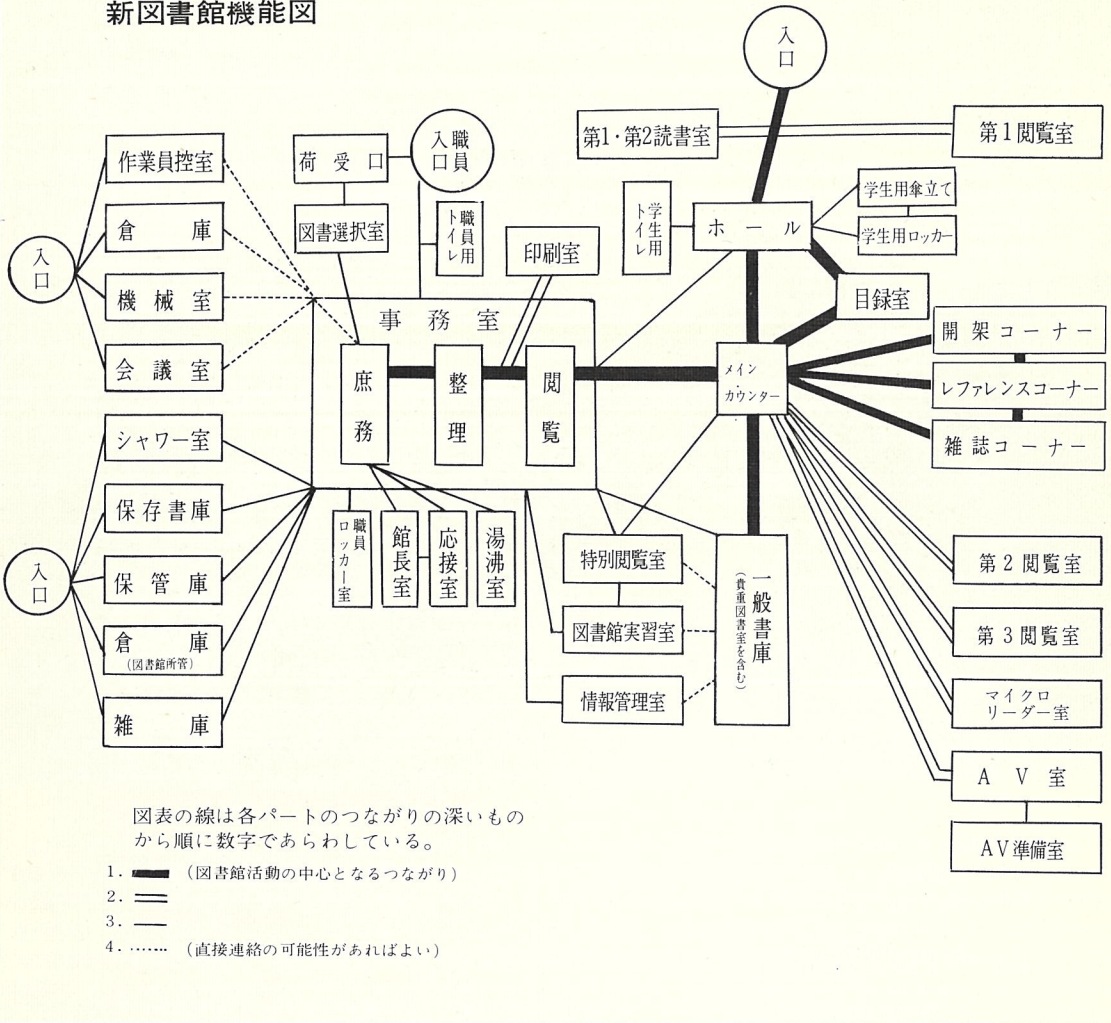
(注) 設計条件、設計者の構想、物価の変動などの理由で、建坪や工費にある程度変動のあることは当然である。

〔3〕 新図書館の機能図

新図書館の主要施設と、それら相互間の機能的な結びつきを、次の機能図に示した。

以上、新図書館の建設につき設計条件を中心にしてその概要を述べたが、全大学人の深い理解と支援により、これが一日も早く実現することを願ってやまない。

新図書館機能図



あとがき

“びぶりおてか” 10号をお届けいたします。

本号は、特に新図書館建設に関する特集号として編集いたしました。

基本設計者による新図書館完成予想図をカラーで掲載いたしました。

静かで、落ちついた、ゆったりとした雰囲気と快適な環境の中で、学生諸君が勉学できる場としての新図書館の建設を心より念願するものであります。

“びぶりおてか” 同志社大学図書館報 No.10 1971年11月1日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 211-2311

編集責任者 前川 嘉門